青年期における自己受容と対人反応特性に関する研究*

今 林 俊 一**

(1993年10月15日 受理)

A Study on Self-acceptance and Interpersonal response trait in Adolescence

Shunichi IMABAYASHI

1. 問 題 と 目 的

倉智 (1986) によると，青年は本来自己の内に持っている潜在的な可能性を最大限に発揮し，自己の価値を実現しようとする欲求，すなわち，自己実現の欲求を持っている。しかし，この欲求をうまく遂行するためには，自我の強さ・自立性・信頼感に支えられた努力・忍耐力・集中力といったものが必要であり，青年が自己を見つめたとき，そこに見い出される自我が貧弱で，不安定であったりすると，その欲求は自己実現には結びつかないという。したがって，青年が真に人間的に成熟していくためには，他者から了解されることを切望するあまり，自分の実力以上に膨張している見せかけ的な自己を萎縮させ，等身大の自己像に近づけていく努力が必要であり，自己をありのままに眺め，受容することでより生産的な自己実現を獲得できると思われる（今林，1993a)。

園原ら (1971) 監修の心理学辞典によると自己受容とは，「自己自身の内部に生起してくる欲求を，自己の内部あるいは社会との間の最小の葛藤によって解決すること」とある。

梶田 (1988) は，アメリカにおける実証的な研究の多くでは，自分自身に対する評価的態度をあらわすものとして，自己受容が自己評価と同義的に用いられていると述べているが，ここにあげた自己受容の定義は，いずれも，冷静な観察の下，そのままの自分を受け入れるといった内容を含んでいると考えられる。受け入れる際にここでは感情や価値判断を交えていないのに対して，伊藤 (1991) は「ありのままの自分を歪めることなく認識し，自分自身として受け入れ好きになること」と定義し，自己認識と自己感情の両面からとらえようとしている。また，宮沢 (1987) も，自己の長所や短所を認識する際，「だから自分はダメな人間だ」という評価になるのではなく，「それでも

* 本研究の一部は，1993年の日本応用心理学会第60回大会において口頭発表したものである。
** 鹿児島大学教育学部心理学科

自分は人間として価値ある存在であり，現在の自分を大切にして，自分を信頼している」という自己の肯定的な受け入れであるべきことを強調している。

人生のうちには数多い困難に見舞われるが前進を続けていくためには，自分自身に対する確固とした信頼が必要であろう。これらのことから，認めたくない欠点や自分の弱さもあえて能動的に引き受け，自分自身をより豊かに発展させるために自己受容というのは，青年期における大きな課題であると考えられる。

宮沢（1978）は，自己受容性を，生き方，対人関係，性格，身体・容姿，能力の5つの領域から構成されるとし，中学生と大学生を比較している。さらに，宮沢（1981）は，自己理解，自己承認，自己価値，自己信頼の4側面27項目からなる自己受容測定尺度（SAI）を作成し，女子学生の発達的な検討を行っている。また，梶田（1988）は，対人関係のあり方を考察して，自己に対する理解や態度と他者に対する理解や態度との間に密接不離な相互関係が見られることを指摘し，対人的な葛藤への対応様式と自己意識のあり方に注目している。自己意識のあり方を特徴づけるものとして，自信，自己受容，自己優越，自己顕示の4側面が取り上げられている。その結果，男子の場合，自己受容の低い者は相手に対して直接的に怒りを表出しやすいのに対し，自己受容の高い者はそのまま放っておくといった無譲的反応が多く，自己顕示の強い者は追いかけていって理由を聞くといった積極的な方向探索的反応を示しがちであり，一方，女子の場合，自己受容の高い者は，「後で理由を聞いて見よう」といった無譲的で余裕のある反応が多いのに対して，自己受容の低い者は，「どうしたのだろうと考える」といった不安と悩みに色づけられた方向探索的な反応が多くみられることを報告している。これらのことからも，対人場面における反応特性と自己受容との関わりを検討することが青年の行動理解にとって重要であると考えられる。

川辺（1990）は，大学生の自己受容性と対人反応特性との関わりについて検討し，自己受容のいくつかの側面によって対人反応特性に差のあることを報告している。しかしながら，葛藤場面の設定は，対母親，対同性の友人，対異性の友人の各1場面ずつにとどまっている。反応様式が，葛藤場面における相手や状況に規定されることを念頭におけば，母親と友人では似たような葛藤場面を想定しにくいし，葛藤状況を1つに限定するのでは反応特性の差と自己受容との関わりを多面的に検討できない。つまり，葛藤場面の状況によって反応様式は変化することが考えられる。このことに関して，今林（1993b）は，相手を同性と異性の友人とし，状況を5場面設定して反応方向についての検討を行っている。その主な結果は，以下の通りである。

①自己受容の高い者は無譲方向，能動的な方向探索的な反応が多く認められた。

②しかし，自己受容の高い者でも葛藤状況によっては，自己受容の低い者に見られると考えられている他譲方向の反応が多く認められた。

③自己受容の低い者は他譲方向の反応よりもむしろ自譲方向の反応が多かった。

④③のことは，自己を肯定的に受け入れられないために自分の判断に自信がないための反応と考えられた。

そこで，本研究では，今林（1993b）の研究結果について，主要な解決様式の反応方向のみでなく，反応水準や反応種別も考慮しながら検討することを目的とする。

2．方　　法

2.1．調査対象者

鹿児島県内の4年制大学の学生，456名（男子249名，女子207名）。

2.2．調査期日

1992年6月下旬～7月上旬。

2.3．調査場所

調査対象者の受講している各講義室内で集団で実施した。

2.4．調査材料*

2.4.1．自己受容の測定

宮沢（1981）により作成された自己受容性測定スケール（SAI）を使用した。このスケールは，自己理解，自己承認，自己価値，自己信頼の4側面27項目とMMPIのLスケールを修正した5項目の計32項目から構成されている。回答形式は，現在の自分の状態について各項目ごとに「あてはまる」から「あてはまらない」の4段階評定であった。

2.4.2．対人反応特性の測定

梶田（1988）により作成された対人葛藤場面を含む5場面について，自分ならばどうするかを自由に記述させた。5場面とは，無視される場面，嘲笑される場面，相手のわがままの場面，一方的な攻撃を受ける場面，好意を阻害される場面である。

2.5．調査手続き

調査材料は，自己受容性測定スケール，同性の友人との葛藤場面，異性の友人との葛藤場面の順に3枚の質問紙として配布された。約20分間で集団で実施された。実施にあたって，自己受容性測定スケールでは回答法を例題に示し各自で回答する方式，葛藤場面では同性異性の友人のうちそれぞれ1名を想定させその個人のイニシャルを記入させてから反応を自由に記述させる方式がとられた。

---

* 調査材料の詳細については，添付資料を参照のこと。

2.6. 結果の処理

2.6.1. 自己受容性測定スケールの得点化と群の抽出

各項目の記述方向に応じて自己受容の程度の高い方の回答から順に4点，3点，2点，1点と得点化し，自己受容の各側面ごとの合計点と4側面の合計値（以下，SAI全体）を算出して，調査対象者の自己受容得点とした。また，自己受容得点の各側面ごとの中央値とSAI全体の中央値によって調査対象者を2つに分け，それぞれの中央値より高い得点の者を自己受容高群（H群），低い得点の者を自己受容低群（L群）とした。なお，各中央値は，自己理解＝23点，自己承認＝16点，自己価値＝20点，自己信頼＝19点，SAI全体＝95点であった。

2.6.2. 対人反応特性の分析

自由記述された回答は，梶田（1980）の対人葛藤状況における反応の分析枠組みに従って整理された（Table 1，参照）。そこでは，回答は対応の方向として，0.方向探索，1.自譲方向，2.他譲方向，3.無譲方向，4.状況離脱の5つのタイプ（反応方向）に区別された。また，回答は，意識内にとどまるのか，外部に表現されたり行動になったりするのかという反応水準が検討され，さらに，単なる感情反応か，防衛的な対処反応か，能動的な対処反応かという反応種別が吟味された。

〔反応様式〕

Table 1　対人葛藤状況における反応の分析枠組み

反応水準→	意識内的（A）			表現・行動的（B）		
反応種別→	感情反応	対処反応		感情反応	対処反応	
反応方向↓	（E）	防衛的（pS）	能動的（aS）	（E）	防衛的（pS）	能動的（aS）
0 方向探索	・悩む ・くよくよする		・原因，理由を考える	・うろうろする		・問題解明のための行動をとる
1 自譲方向	・悲しむ ・後悔する ・意気消沈する	・あきらめる ・がまんする	・反省して決意する	・自虐的行動	・謝まる ・言われるままにする	・性格，行動を自ら改める ・自らの犠牲において許す
2 他譲方向	・腹を立てる	・弁解して了解してもらおうと思う	・相手に譲らせようと思う	・ふくれっ面をしてみせる ・言葉や行為で攻撃する	・弁解して了解を求める	・譲らせる ・主張し説得する
3 無譲方向		・なかったことにしようと思う	・次の機会を待つ		・なかったことにする	・双方の顔が立つ方法で解決する
4 状況離脱方向	・いやになる	・気を紛らす	・黙殺する ・気にしないようにする	・外に飛び出す	・部屋などにとじこもって自分一人になる	・他の人とつきあったり，他のことをしたりする

3．結　　果

Table 2～Table 6は，対同性の友人の各葛藤場面における主要な解決様式について示したものである。

Table 2は，無視される場面における主要な解決様式である。SAIの4側面全てにおいて最も多い反応は，「理由を聞く」「もう一度声をかけてみる」（0 BaS）であり，2番目に多い反応は，「そっとしておく」「機嫌がよくないのだろうと思い放っておく」（3 BpS）である。自己信頼において有意な関連がみられた（$\chi^2=14.24$, df=3, $p<0.01$）ので残差分析を行ったところ，H群に3 AaSの無譲方向的な能動的対処反応の多いことが明らかにされた。Table 3は，嘲笑される場面における主要な解決様式である。ここで，H群には，「人の趣味はそれぞれだから気にしない」（3 BpS）や「好きなところを説明する」（2 BaS）という対処反応が多いのに対して，L群には，「いいじゃないかと反論する」「相手の趣味を笑い返す」（2 BE）という感情反応が多い。自己理解，自己価値，自己信頼において有意な関連がみられた（順に，$\chi^2=8.92$, $\chi^2=9.88$, $\chi^2=10.92$; 全て，df=3, $p<0.05$）ので残差分析を行ったところ，3側面とも，H群に2 BaSの他譲方向的な能動的対処反応が多いのに対して，L群には2 BEの他譲方向的な感情反応の多いことが明らかにされた。Table 4は，相手のわがままの場面における主要な解決様式である。SAIの4側面全てにおいて最も多い反応は，H群L群共に，「仕方なくつき合う」「しぶしぶついていく」（1 BpS）であり，2番目に多い反応は，「進んでつき合う」「疲れたと言いながらもつき合ってあげる」（1 BaS）である。χ^2検定の結果，有意な関連は認められなかった。Table 5は，一方的な攻撃を受ける場面における主要な解決様式である。SAIの多くの側面において最も多い反応は，「自分でするべきじゃないかと文句を言う」「謝るが人に頼むなと言い返す」（2 BE）であり，2番目に多い反応は，「再度謝る」「もう一度取りに行く」（1 BpS）である。χ^2検定の結果，有意な関連は認められなかった。Table 6は，好意を阻害される場面における主要な解決様式である。全ての側面において最も多い反応は，「あぁ，そうと言う」「そのままにする」「別に何も思わない」（3 BpS）（3 BaS）（3 ApS）という無譲方向への反応が5割近くを占めている。さらに，「がっかりする」「悔しがる」（1 AE）という反応が多い。自己理解において有意な関連がみられた（$\chi^2=12.15$, df=3, $p<0.01$）ので残差分析を行ったところ，H群に3 BaSの無譲

Table 2
無視される場面における主要な解決様式（対同性）

解決様式	0 BaS	3 BpS	0 AaS	3 AaS
自己理解H	79	57	27	21
自己理解L	74	50	14	16
自己承認H	81	52	22	20
自己承認L	74	58	19	19
自己価値H	68	41	20	15
自己価値L	86	69	21	22
自己信頼H	79	55	24	15
自己信頼L	76	54	17	0

注）数値は出現頻度（人数）（以下，同様）

自己信頼の残差分析表

解決様式	0 BaS	3 BpS	0 AaS	3 AaS
自己信頼H	−1.08	−0.93	0.62	3.66**
自己信頼L	1.08	0.98	−0.62	−3.66**

注）+:p<0.10, *:p<0.05, **:p<0.01
（以下，同様）

Table 3

嘲笑される場面における主要な解決様式（対同性）

解決様式	2 BaS	3 BpS	2 B E	1 ApS
自己理解H	43	35	34	22
自己理解L	18	33	40	21
自己承認H	33	34	31	23
自己承認L	28	37	42	20
自己価値H	32	32	20	16
自己評価L	29	37	53	26
自己信頼H	38	38	28	16
自己信頼L	23	33	46	27

自己理解の残差分析表

解決様式	2 BaS	3 BpS	2 B E	1 ApS
自己理解H	2.90**	−0.58	−1.76+	−0.48
自己理解L	−2.90**	0.58	1.76+	0.48

自己価値の残差分析表

解決様式	2 BaS	3 BpS	2 B E	1 ApS
自己価値H	2.13*	1.11	−2.78**	−0.39
自己価値L	−2.13*	−1.11	2.78**	0.39

自己信頼の残差分析表

解決様式	2 BaS	3 BpS	2 B E	1 ApS
自己信頼H	2.54*	1.06	−2.13*	−1.58
自己信頼L	−2.54*	−1.06	2.13*	1.58

Table 4

相手のわがままの場面における主要な解決様式（対同性）

解決様式	1 BpS	1 BaS	3 BaS	2 Bas
自己理解H	123	68	30	15
自己理解L	115	50	21	7
自己承認H	116	59	27	11
自己承認L	127	61	25	11
自己価値H	97	51	24	12
自己価値L	144	68	28	10
自己信頼H	112	62	27	13
自己信頼L	129	58	24	9

Table 5

一方的な攻撃を受ける場面における主要な解決様式（対同性）

解決様式	2 B E	1 BpS	1 BaS	2 A E
自己理解H	96	60	31	22
自己理解L	62	65	23	19
自己承認H	87	58	31	22
自己承認L	71	71	24	21
自己価値H	72	50	23	15
自己価値L	86	77	32	27
自己信頼H	84	58	29	18
自己信頼L	73	71	26	25

Table 6

好意を阻害される場面における主要な解決様式（対同性）

解決様式	3 BpS	3 BaS	3 ApS	1 A E
自己理解H	63	33	27	22
自己理解L	44	12	36	26
自己承認H	48	28	31	28
自己承認L	63	17	33	23
自己価値H	40	22	27	23
自己価値L	70	22	37	27
自己信頼H	61	26	25	23
自己信頼L	50	19	37	27

自己理解の残差分析表

解決様式	3 BpS	3 BaS	3 ApS	1 A E
自己理解H	1.01	2.70**	−2.50*	−1.43
自己理解L	−1.01	−2.70**	2.50*	1.43

方向的な能動的対処反応が多いのに対して，L群には3 ApSの無譲方向的な防衛的対処反応の多いことが明らかにされた。

Table 7 ～Table 11は，対異性の友人の各葛藤場面における主要な解決様式について示したものである。

Table 7は，無視される場面における主要な解決様式である。全ての側面において最も多い反応は，「そのままにしておく」（3 BpS）である。自己承認において有意な関連がみられた（$\chi^2=8.29$, df $=3$, $p<0.05$）ので残差分析を行ったところ，L群に1 AEの自譲方向的な感情反応の多いことが

明らかにされた。Table 8は，嘲笑される場面における主要な解決様式である。全ての側面において最も多い反応は，H群L群共に，「別にいいでしょうと反論する」（2BE）であり，2番目に多い反応は，「趣味の違いだと思う」「どうもしない」（3BpS）である。χ^2検定の結果，有意な関連は認められなかった。Table 9は，相手のわがままの場面における主要な解決様式である。全ての側面において最も多い反応は，H群L群共に，「理由を聞く」（0BaS）であり，2番目に多い反応は，「自分も一緒に帰る」（1BpS）である。自己理解と自己価値において有意な関連がみられた（順に，$\chi^2=7.68$, $p<0.10$; $\chi^2=11.06$, $p<0.05$; 全て，df＝3）ので残差分析を行ったところ，H群に0BaSの方向探索的な能動的対処反応が多いのに対して，L群には1BaSや1BpSの自譲方向的な対処反応の多いことが明らかにされた。

Table 7
無視される場面における主要な解決様式（対異性）

解決様式	3BpS	2AE	1AE	2BE
自己理解H	109	22	21	20
自己理解L	80	17	27	23
自己承認H	100	21	14	24
自己承認L	93	19	33	20
自己価値H	83	21	19	14
自己価値L	108	19	29	30
自己信頼H	90	17	22	23
自己信頼L	100	23	26	21

自己承認の残差分析表

解決様式	3BpS	2AE	1AE	2BE
自己承認H	1.20	0.46	−2.86**	0.78
自己承認L	−1 20	−0.46	2.86**	−0.78

Table 8
嘲笑される場面における主要な解決様式（対異性）

解決様式	2BE	3BpS	2BaS	4AaS
自己理解H	56	51	35	26
自己理解L	40	35	30	27
自己承認H	44	42	36	24
自己承認L	53	46	29	30
自己価値H	38	37	26	19
自己価値L	59	51	35	33
自己信頼H	52	45	29	27
自己信頼L	45	41	37	27

Table 9
相手のわがままの場面における主要な解決様式（対異性）

解決様式	0BaS	1BpS	3BpS	1BaS
自己理解H	110	53	21	14
自己理解L	65	48	19	21
自己承認H	93	47	22	18
自己承認L	84	53	20	18
自己価値H	92	33	15	13
自己価値L	86	68	25	23
自己信頼H	91	45	23	15
自己信頼L	86	57	19	21

自己理解の残差分析表

解決様式	0BaS	1BpS	3BpS	1BaS
自己理解H	2.43*	−0.94	−0.53	−2.06*
自己理解L	−2.43*	0.94	0.53	2.06*

自己価値の残差分析表

解決様式	0BaS	1BaS	3BpS	1BaS
自己価値H	3.28**	−2.50*	−0.76	−0.89
自己価値L	−3.28**	2.50*	0.76	0.89

Table 10
一方的な攻撃を受ける場面における主要な解決様式（対異性）

解決様式	1BpS	1BaS	2BE	2BpS
自己理解H	113	58	24	10
自己理解L	109	29	24	9
自己承認H	117	47	24	6
自己承認L	112	41	24	13
自己価値H	95	42	18	5
自己価値L	133	46	29	14
自己信頼H	109	52	23	5
自己信頼L	118	37	23	14

自己理解の残差分析表

解決様式	1BpS	1BaS	2BE	2ApS
自己理解H	−1.69+	2.59**	−0.67	−0.17
自己理解L	1.69+	−2.59**	0.67	0.17

自己信頼の残差分析表

解決様式	1BpS	1BaS	2BE	2BpS
自己信頼H	−0.75	1.90+	0.06	−2.08*
自己信頼L	0.75	−1.90+	−0.06	2.08*

Table 11
好意を阻害される場面における主要な解決様式（対異性）

解決様式	1 ApS	2 BE	3 BpS	1 AE
自己理解H	96	48	15	13
自己理解L	93	36	14	17
自己承認H	87	52	15	12
自己承認L	107	32	15	19
自己価値H	73	40	11	9
自己価値L	118	44	19	21
自己信頼H	90	47	13	12
自己信頼L	101	37	17	19

自己承認の残差分析表

解決様式	1 ApS	2 BE	3 BpS	1 AE
自己承認H	−1.76+	2.73**	0.12	−1.20
自己承認L	1.76+	−2.73**	−0.12	1.20

Table 10は，一方的な攻撃を受ける場面における主要な解決様式である。全ての側面において最も多い反応は，H群L群共に，「ごめんと言う」「ひたすら謝る」（1 BpS）であり，2番目に多い反応は，「反省し心から謝る」「もう一度買いに行く」（1 BaS）である。自己理解と自己信頼において有意な関連がみられた（順に，$\chi^2=6.77$，$\chi^2=7.12$；全て，$df=3$，$p<0.10$）ので残差分析を行ったところ，H群に1 BaSの能動的な対処反応が多いのに対して，L群には1 BpSや2 BpSの防衛的な対処反応の多いことが明らかにされた。Table 11は，好意を阻害された場面における主要な解決様式である。全ての側面において最も多い反応は，H群L群共に，「1人で食べる」「持って帰る」（1 ApS）であり，2番目に多い反応は，「じゃあ1人で食べると言って怒る」「おいしいのにとむくれる」（2 BE）である。自己承認において有意な関連がみられた（$\chi^2=8.26$，$df=3$，$p<0.05$）ので残差分析を行ったところ，H群に2 BEの他譲方向的な感情反応が多いのに対して，L群には1 ApSの自譲方向的な防衛的対処反応の多いことが明らかにされた。

4．考　　察

Table 2～Table 6の対同性の友人の葛藤場面において，自己受容の高低による解決様式に有意な関連がみられたのは，無視される場面，嘲笑される場面，好意を阻害される場面であった。反応種別における違いとしては，自己受容H群では能動的な対処反応が多くみられるのに対して，自己受容L群では感情反応や防衛的な対処反応が多くみられることである。また，反応水準では，ほとんどの場面で表現・行動的な反応がみられているが，好意を阻害される場面では自己受容L群に意識内的反応が多くみられた。反応方向については，5つの場面の内容により異なり，状況離脱方向を除いた反応方向がみられている（自己受容H群には無譲方向的な反応が比較的多くみられる）。

Table 7～Table 11の対異性の友人の葛藤場面において，自己受容の高低による解決様式に有意な関連がみられたのは，無視される場面，相手のわがままの場面，一方的な攻撃を受ける場面，好意を阻害された場面であった。反応種別における違いとしては，自己受容H群では能動的な対処反応や感情反応が多いのに対して，自己受容L群では防衛的な対処反応や感情反応が多くみられることである。また，反応水準では，ほとんどの場面で表現・行動的な反応がみられているが，無視される場面や好意を阻害される場面では自己受容L群に意識内的反応が多くみられた。反応方向については，自己受容H群に方向探索的な反応や他譲方向的な反応が多くみられるのに対して，自己受

容L群では自譲方向的な反応が多くみられている。

反応水準については，特に，好意を阻害された場面で，自己受容H群では表現・行動的反応が多いのに対して，L群では意識内的反応が多いという以外では，葛藤場面によって反応水準は規定されている。

反応の相手の性の違いによる解決様式の特徴が，反応方向に認められた。すなわち，反応方向では，同性の場合，自己受容H群では無譲方向的な反応，L群では他譲方向的な反応が多いのに対して，異性の場合には，自己受容H群では方向探索的な反応や他譲的な反応，L群では自譲方向的な反応が多い。方向探索的な反応について，梶田（1988）は，「低自己受容者に方向探索反応が多くみられる」ことを報告しているが，そこでの反応は「どうしたのだろうと考える」（0 AaS）という意識内にとどまる不安と悩みに特徴づけられたものであるのに対して，本研究で得られた「理由を聞く」（0 BaS）という能動的で表現・行動的な対処反応の多いという点が異なっている。また，同性の場合，自己受容H群の解決様式には余裕のある反応や，焦りの少ない反応が多く，L群の解決様式には自尊心の低下を防ぐような反応が多くなっている。異性の場合，自己受容H群の解決様式には事態を好ましく解決するための反応が多く，L群の解決様式には自己の判断を明確に示さず相手の反応を確かめようとする（衝突を避けようとする）消極的な反応が多くなっている。

以上のことから，今林（1993 b）の結果と併せてみると，改めて以下のように考えることができよう。

①自己受容の高い者は無譲方向的・方向探索的な能動的対処反応が多いのに対して，自己受容の低い者は自譲方向的・他譲方向的な感情反応や防衛的対処反応が多い。

②しかし，自己受容の高い者でも相手が異性の場合，自己受容の低い者に多いと考えられている他譲方向の感情反応が多い。

③一方，自己受容の低い者は相手が異性の場合，自譲方向的な感情反応や防衛的対処反応が多い。

④これらの傾向は，自己を肯定的に受容できているかどうかで，自分の判断の自信の有無と関連していると考えられる。

なお，本研究では，調査対象者の性別についての検討を行っていない。湯川（1990）は，性役割ステレオタイプの内容について，児童期までは同性の役割特性を高く評価するのに対し，青年期になると男子女子とも男性役割特性を高く評価するように変化すると指摘している。それによると，男子には「冒険好き，攻撃的，意志の強い，自己主張の強い，行動力のある，決断力のある，指導力のある等」が，女子には「美しい，謙虚な，依存的な，やさしい，行儀のよい，従順な，細かいことに気づく等」があげられている。青年は，性役割についての自分なりの概念や価値観を確立しつつ，それと実際の行動とを一致させることや，自分の中にある別の様々な価値観や概念と性役割観を統合させることといった重要な課題に直面しているといえよう。これらのことから，青年が日常の葛藤場面で示す反応様式は相手の性別によって異なると同時に，自分の性役割の再構成の状態，すなわち，自己受容のあり方によっても異なると考えられる。今後は，この性別についての観点か

らの検討が必要であると思われる。また，特定の相手との人間関係の親密さや将来にむけての人間関係の展開に対する希望や期待，あるいは，葛藤状況の経験の有無などの観点からの検討も対人場面における青年の行動理解にとって重要であると思われる。

5．要約と結論

本研究は，大学生456名を対象にして，青年期における自己受容と対人反応特性との関連について検討したものである。

主な結果として，以下のことが明らかにされた。

①自己受容の高い者は無譲方向的・方向探索的な能動的対処反応が多い。

②自己受容の低い者は自譲方向的・他譲方向的な感情反応や防衛的対処反応が多い。

③相手が異性の場合，自己受容の高い者でも他譲方向の感情反応が多くなることがある。

④これらの傾向は，自己受容の状態が葛藤状況における自分の判断に対する自信の有無と関連していると考えられた。

今後さらに，調査対象者の性別や対人関係の親密度，葛藤場面の経験の有無などからの実証的な検討が必要であろう。

付記：資料収集にあたり，調査対象の学生の皆様にご協力をいただきました。また，竹下雅子氏（現，東京都世田谷区役所職員）には，資料の収集において，ご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

引用文献

1) 今林俊一　1993a 青年期における孤独感と自己受容に関する研究，鹿児島大学教育学部研究紀要，44，257-272.
2) 今林俊一　1993b 青年期の自己受容と対人反応特性に関する研究，日本応用心理学会第60回大会発表論文集，170-171.
3) 伊藤美奈子　1991　自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的変化－2次元から見た自己受容発達プロセス－，発達心理学研究，2(2)，70-77.
4) 梶田叡一　1980　自己意識の心理学，東京大学出版会.
5) 梶田叡一　1988　自己意識の心理学　第2版，東京大学出版会.
6) 川辺佳乃　1990　自己受容性に関する一研究－対人反応特性との関係から－，平成1年度鹿児島大学教育学部心理学科卒業論文.
7) 倉智佐一　1986　人格形成の心理学，北大路書房.
8) 宮沢秀次　1978　青年期における自己受容性の一研究，名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），25，105-117.
9) 宮沢秀次　1981　女子青年における自己受容性の発達的研究，日本心理学会第45回大会発表論文集，461.
10) 宮沢秀次　1987　青年期の自己受容性の研究，青年心理学研究，1，2-16.
11) 園原太郎・柿崎祐一・本吉良治（監修）　1971　心理学辞典，ミネルヴァ書房.
12) 湯川隆子　1990　第4章　性役割；無藤隆ほか（編）　発達心理学入門Ⅱ　青年・成人・老人，東京大学出版会，46-60.

添付資料１．自己受容の測定（宮沢，1981より）

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
（例）　私はいつも楽しい。（記入例）		⊕		
1．　私は自分の性格を知っている。				
2．　私は自分で決めたことには責任を持つ。				
3．　私は今の自分に不満である。				
4．　私は価値のない人間である。				
5．　ゲーム（勝負事）には負けるより勝ちたい。				
6．　私は自分の短所がわかる。				
7．　私は自信がないため物事をあきらめがちである。				
8．　私の容姿（すがたかたち）には変えたいところが多い。				
9．　まわりの人は皆私より立派な人間である。				
10．　からだの調子が良くないと気むずかしくなるときがある。				
11．　私は自分の能力や才能を冷静にみることができる。				
12．　私は自分のことは自分で解決する。				
13．　私は今の自分を大切にしたい。				
14．　私には人に誇るものが何もない。				
15．　ときどき人の噂をする。				
16．　私には自分の得意なことがわからない。				
17．　私は困難にぶつかってもそれを克服できる。				
18．　私は自分とは違う誰か別の人になりたい。				
19．　私は生まれてこない方が良かった。				
20．　いつも本当のことを言うとは限らない。				
21．　私は自分のことがわからない。				
22．　私は将来何が起ころうとも自分なりにやっていける。				
23．　私は自分にあった生活をしている。				
24．　私は生きていても仕方がない。				
25．　ときどき腹を立てる。				
26．　私は自分の長所がわからない。				
27．　私は目標に向かって生活している。				
28．　私は性格をまったく別の性格に変えたい。				
29．　私は生きる価値のない人間である。				
30．　私は自分の特徴がわかる。				
31．　私は自分の才能を生かした人生を送ることができる。				
32．　私は自分の容姿（すがたかたち）の悪い面がわかる。				

添付資料２．対人反応特性の測定（梶田，1988に付加）

≪対同性の友人の各葛藤場面≫

これから，親しい同性の友人とのいろいろな場面がでてきます。まず，あなたの親しい同性の友人を，１人思い浮かべて下さい。そして，その人のイニシャルを書いて下さい。　（　．　）

校内を歩いていると，すぐ前にふだん親しい同性の友人の姿が見えたので，声をかけました。ところが，その友人は不機嫌そうな顔をしてちらっと後ろを振り返っただけで，さっさと行ってしまいました。こんな時あなたならどうすると思いますか。

デパートで洋服をみている時あなたが素敵だと思った服を一緒にいた同性の友人にみせると，「へんな趣味。」と言って笑いました。こんな時あなたならどうしますか。

あなたは同性の友人と街で買物をしていました。何時間も歩いたのであなたはすっかり疲れてしまい，もう帰りたい，と思っているところへ，その友人が「買い忘れたものがあるからつきあって。」と言って強引に腕を引っ張ります。こんな時あなたならどうすると思いますか。

あなたが提出物の準備をしていると，同性の友人に「自分のも一緒に提出してきてほしい。それから，そのついでにこの前の返却物も受け取ってきてほしい。」と言われていたのに，あなたは友人に頼まれた，１つを忘れてしまいました。そのことを謝ると，「信じられない。あんなに頼んだのに。」と言われました。こんな時あなたならどうすると思いますか。

あなたが，同性の友人についさっき聞いたニュースを知らせると，「そんなことくらい知ってるよ。」と言われました。こんな時あなたならどうすると思いますか。

≪対異性の友人の各葛藤場面≫

次に，親しい異性の友人とのいろいろな場面がでてきます。まず，あなたの親しい異性の友人を，1人思い浮かべて下さい。なお，いない場合には，片想いの人でもいいですし，憧れる異性でもいいですので，特定の人を想定して下さい。そして，その人のイニシャルを書いて下さい。　（　．　）

あなたの前を異性のグループが話をしながら歩いています。その中にいたあなたの親しい異性の友人に声をかけると，何も答えずにちらっとあなたを見ただけで再びグループの話に加わっています。こんな時あなたならどうすると思いますか。

あなたが親しい異性の友人と2人で雑誌を見ていると，あなたがとても好きなタレントの記事が載っていたのでうれしくなって読んでいると，その友人は「そんな人が好きなの。」と言って笑いました。こんな時あなたならどうすると思いますか。

親しい異性の友人と2人で街を歩いていると，突然その相手が，「もう，帰る。！」と言いだしました。こんな時あなたならどうすると思いますか。

あなたの買物のついでに異性の友人から頼まれものをしていたのに，ついうっかり忘れてしまいました。そのことを話して謝ると，「信じられない。あんなにお願いしたのに。」と言われました。こんな時あなたならどうすると思いますか。

おいしそうなおまんじゅうが売っていたので，異性の友人と2人で食べようと思って買いました。その友人にあげると，「いらない。甘いの嫌いだから。」と嫌な顔でつき返されてしまいました。こんな時あなたならどうしますか。